

正宗蓮日

教學小辭典

編輯部教學學會創

創 學 會

常樂我淨……………	二七
總別の二義……………	二六
生死一大事血脈……………	二九
染淨の二法……………	二七
示同凡夫……………	二七
如来秘密神通之力……………	二七
自受用身の勝劣……………	二七
本因の境智行位……………	二五
初住位の本因と久遠元初の本因……………	二六
随縁真如の智……………	二七
本仏論の遮難……………	二六
御義口伝……………	二六
我が身即妙法蓮華經……………	二二
直達正觀……………	二三
福十号に過ぐ……………	二三
宿縁深厚……………	二五

草木成仏……………	二六
垂迹と再誕……………	二八

第五編 信心修行

授受・折伏……………	二二
順縁・逆縁……………	二四
三類の強敵……………	二五
三障四魔……………	二七
十四誹謗……………	二九
謗法嚴戒……………	三〇
還著於本人……………	三〇
病氣の原因……………	三三
変毒為藥……………	三五
転重軽受……………	三六
五十展転……………	三七
福運……………	三八

顕益・冥益……………三〇九

不自惜身命……………三二一

有徳王と覚徳比丘……………三二四

異体同心……………三二五

如説修行……………三七

自行化他……………三八

聞法下種と発心下種……………三九

以信代慧……………三一

随方毘尼……………三三

善知識・悪知識……………三三

世法と仏法……………三四

勇猛精進……………三五

諸天の加護……………三六

魔の通力……………三七

供養……………三九

臨終の相……………三一

女人成仏……………三三

方便品・寿量品を讀誦する意味……………三三

第六編 仏教史

釈尊の一生……………三五

付法蔵の二十四人……………三七

經典の結集……………三四

中国への仏教伝来……………三四

法華經の新訳・旧訳……………三五

日本への仏教伝来……………三六

日蓮大聖人のご一生……………三八

国家諫曉……………三〇

日興上人……………三五

六老僧……………三五

二箇相承……………三七

身延離山……………三八

第五編 信心修行

【摂受・折伏】

仏教には法を弘める方法に二あり、一には摂受、二には折伏である。法華經安樂行品第十四に「他の經典や他宗の僧の過失を説いたり、惡口を言つてはならない」等とあるのは摂受であり、涅槃經に「刀劍や弓矢を持つて弘法せよ」また、天台の「法華折伏・破權門理」とあるのが折伏である。すなわち摂受とは摂引容受の義で、相手の違法を容認しつつしだいに誘引していく化導であり、折伏とは破折屈伏の義で、あくまで相手の邪宗邪義を折り正法に伏せしめる実践行為であり、すなわち惡心を折って信心に伏せしめていく嚴愛の行為である。このように摂受と折伏は水火のように相容れない法門である。しかして正像年間、熟脱の機根のためには摂受が必要であり、末法には折伏を肝要となすについて、御書には次のように仰せられている。

開目抄下（二三五頁） 夫れ摂受・折伏と申す法門は水火のごとし火は水をいとう水は火をにくむ、摂受の者は折伏をわらう折伏の者は摂受をかなしむ、無智・惡人の国土に充滿の時は摂受を前とす安樂行品のごとし、邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とす常不輕品のごとし……末法に摂受・折伏あるべし所謂惡国・破法の両国あるべきゆへなり、日本国の当世は惡国か破法の国かと・しるべし。

佐渡御書（九五七頁） 仏法は摂受・折伏時によるべし譬ば世間の文・武二道の如しされば昔の大聖は時によりて法を行ず……惡王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し。

現在の日本は謗法の邪宗徒が充滿している現状であり、折伏を前とすべきことは当然である。しかるに日蓮宗と名乗りながら日蓮大聖人の時は折伏であり、文化の進んだ今日は授受である等と立てる者がある。しかも、前引の開目抄下に「末法に授受・折伏あるべし」等の文をその証拠とする邪見・曲解を、次に日寛上人の開目抄文段を引いて破折する。

開目抄下巻愚記（富要四卷三二八頁）末法に授受折伏あるべし等の文、問う若し爾らば末法に亦授受を行すべきや、答う授折二門に就いて古来の義蘭菊なり、今且らく五義に約す云云、一には教法に約す、謂く其の主旨を論ずれば法華は正しく是れ折伏の教法なり、是れ則ち法華の開頭は爾前の権理を破し法華の実理を顯わす故なり、玄文第九に云く法華折伏・破権門理等云云、本迹開顯准例して知るべし。二には機縁に約す、謂く若し本已有善の衆生の為には授受門を以て之を將護す、若し本未有善の衆生の為には折伏門を以て之を強毒す、是の故に疏の第十に云く本已有善・釈迦小を以て之を將護す、本未有善・不輕大を以て之を強毒す等云云。三には時節に約す、宗祖云く末法に於ては小大権実顯密共に教のみ有って得道無し、一閻浮提皆謗法と為り畢んぬ、逆縁の為に但妙法蓮華經の五字に限るのみ例せば不輕品の如し云云、下文に云く設い山林に交りて一念三千の觀を凝すとも時機を知らず授折二門を弁えずば争でか生死を離るべき云云、其の外諸文枚舉に違あらず云云、四には国土に約す即今文の意なり、謂く末法折伏の時なりと雖も若し横に余國を尋ねば豈惡國無からんや、其の惡國に於ては授受を前とすべし、然るに日本國の當世は破法の國なること分明なり故に折伏を前と為すべし云云。五には教法流布の前後に約す、既に竜樹・天親・天台・伝教等、前前流布の教法を破して當機益物の教法を弘む、今蓮祖亦爾なり、前代流布の爾前迹門を破して末法適時の大

白法本門壽量の肝心かんじんを弘む、其の相諸抄の如し之を略す。

しかして末法の折伏について二義がある。一には法体の折伏ほつたいであつて、法華折伏・破權門理のごときものである。二には化儀けぎの折伏であつて涅槃經ねはんに「正法を護持せん者は五戒を受けず威儀いぎを修せず応に刀劍とうけん、弓箭きうせん、鉾むさく槩きを持すべし」と、すなわち仙予せんよ國王等がこれである。

觀心本尊抄(二五四頁) 当に知るべし此の四菩薩折伏しやくふくを現ずる時は賢王と成つて愚王を誠責かいしきくし授受しやうじゆを行ずる時は僧と成つて正法を弘持す。

いま、化儀の折伏に望んで法体の折伏を判ずるゆえに、日蓮大聖人ご在世中の折伏をも、なお授受と名づけるのである。ゆえに「授受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す」という。「折伏を現ずる時は賢王と成つて愚王を誠責し」は、広宣流布の時、現在の折伏活動を判ぜられているのである。ともあれ、化儀の広宣流布、本門戒壇の建立には、賢王が出現して正法流布にあたることが明らかである。有徳王うとくおう・覺徳比丘かくとくびくの昔を思い合わせ、創価学会の重大使命を予言した文と拝すべきである。

【順縁・逆縁】

折伏をうけて素直すなおに入信し、この世で功德をうけ幸福になる者は順縁である。これに反し三年も七年も反対を続け、ついには地獄のような境涯におちいつていく者などは逆縁である。

開目抄下(二二二頁) 此等はさてをく我が一門の者のためにしるす他人は信ぜざれば逆縁なるべし。

法華取要抄（三三六頁） 末法に於ては大小・權實・顯密共に教のみ有って得道無し一閻浮提皆謗法と為り畢んぬ、逆縁の爲には但妙法蓮華經の五字に限る、例せば不輕品の如し我が門弟は順縁なり日本国は逆縁なり。末法における折伏は相手が信心してもしなくても、大御本尊を堅く受持して邪智・謗法を強折するのである。相手は謗法の罪により、いったんは地獄へ落ちるけれども、御本尊に縁をもった功德により、将来必ずその罪を滅し終わって、再び御本尊に巡り会って成仏する。これが逆縁の衆生であり、毒鼓の縁ともいう。教機時国抄（四三八頁） 謗法の者に向つては一向に法華經を説くべし毒鼓の縁と成さんが為なり、例せば不輕菩薩の如し。

上野殿御返事（一五五五頁） 天竺に嫉妬の女人あり・男をにくむ故に……年来・男のよみ奉る法華經の第五の巻をとり・両の足にてさむざむにふみける、其の後命つきて地獄にをつ・両の足ばかり地獄にいらす・獄卒鉄杖をもつて・うてどもいらす、是は法華經をふみし逆縁の功德による、今日蓮をにくむ故にせうぼうが第五の巻を取りて予がをもてをうつ・是も逆縁となるべきか。

なお、法華經壽量品に「不失心者」とあるのは、久遠元初の聞法下種を忘れないで信心できた順縁の人であり、「余失心者」とあるのは、久遠元初の下種を忘れていま信心できない逆縁の人というべきである。

【三類の強敵】

末法に法華經を弘通すると、その正法の行者を迫害する三種類の強敵が出現する。一に俗衆増上慢、二に

は道門増上慢、三に僧聖増上慢である。

その文は法華經勸持品にある。勸持品で八十万億那由他の菩薩が、仏滅後における弘經の誓いを説いた。し
こうして、その時代の様相と正法の行者を迫害する模様を次のように説き、天台はその文を三類に判釈した。

(開目抄下二二四頁)

第一類 諸の無智の人の惡口罵詈訾等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし。

第二類 惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん。

第三類 或は阿練若に納衣にして空閑に在って自ら眞の道を行ずと謂って人間を輕賤する者有らん利養に貪著
するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の如くならん、是の人惡心を
懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮て好んで我等が過を出さん、常に大衆の中に在って我等を毀らんと
欲するが故に国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人・外
道の論議を説くと謂わん、濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其身に入つて我を罵詈訾辱せん、濁世
の惡比丘は仏の方便隨宜の所説の法を知らず惡口し響聲し數數擯出せられん。

日蓮大聖人は末法に出現せられ、當時の世相は三類の強敵が充滿していて、しかも法華經の予言と寸分違ふ
ことなく、一國の迫害を一身に受けられたことを次のように明かされている。

開目抄下(二二五頁) 当世は如来滅後・二千二百余年なり大地は指ば・はづるとも春は・花は・さかずと
も三類の敵人・必ず日本國にあるべし。

如説修行抄(五〇一頁) 其の上眞実の法華經の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せ

り、されば此の経を聴聞し始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類さんるい甚しなしかるべしと。

如説修行抄（五〇四頁）誰人たれひとにても坐おわせ諸経は無得道・墮地獄だじごくの根源・法華経独り成仏の法なりと音こゝろも惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し……されば如説修行の法華経の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ。

日蓮大聖人ご在世中において、俗衆ぞくしゆ増上慢とは一般社会の人々、道門増上慢とは邪宗の僧等、僭聖せんしやう増上慢とは極楽寺良観や建長寺道隆等であつた。

現在において、俗衆増上慢とは隣人、会社の同僚、社会一般の人々の反対等であり、道門増上慢とは邪宗教の僧や布教師等の怨嫉おんしつであり、僭聖増上慢とは国家権力や報道機関等をもつて迫害する輩やからをいうのであろう。これら三類の強敵を呼び起こしたのは日蓮正宗創価学会のみであり、日蓮大聖人の大仏法を広宣流布すべき唯一の団体といふことができる。

【三障四魔】

天台大師の摩訶止観第五にあり、御書には、数多くこれを引かれている。

三障とは、一に煩惱障……貪・瞋・癡等により、二に業障……妻子等により、三に報障……国主・父母等により起こる。

四魔とは、一に陰魔……五体により、二に煩惱魔……妄惑のゆえに、三に死魔……修行中の者の若死等によ

り、四に天子魔……第六天の魔王により起こる。

日蓮大聖人は兄弟抄（一〇八七頁）に「魔競は必ず正法と知るべからず」と仰せられて、仏道修行の途上には必ず三障四魔の競い起こるべきことを示されている。また天台の摩訶止観第五の巻の「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば將に人をして惡道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」の文を引かれて「此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未來の資糧とせよ」と、ご教訓になっている。しかして、三障四魔を粉碎すれば必ず成仏できることを確信すべきである。

また天子魔の最も恐るべきことを、次のようにお示しになっている。

三沢抄（一四八七頁） 仏にならむとする時には・かならず影の身にそうがごとく・雨に雲のあるがごとく・三障四魔と申して七の大事出現す、設ひ・からくして六は・すぐれども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし、其の六は且くをく第七の大難は天子魔と申す物なり。

開目抄上（二〇〇頁） 日本国に此れをしれる者は但日蓮一人なり。これを一言も申し出すならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来るべし、いはずば・慈悲なきに・にたりと思惟するに法華經・涅槃經等に此の二辺を合せ見るに・いはずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮べし、いうならば三障四魔必ず競い起るべしと・しりぬ。

兵衛志殿御返事（一〇九一頁） 凡夫の仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり。

【十四誹謗^{じゆうしひぼう}】

法華經譬喻品第三の文から十四種の誹謗を立てる。その御文は、

松野殿御返事（一三八二頁）「惡の因に十四あり・一に憍慢・二に懈怠・三に計我・四に淺識・五に著欲・六に不解・七に不信・八に鬺蹙・九に疑惑・十に誹謗・十一に輕善・十二に憎善・十三に嫉善・十四に恨善なり」此の十四誹謗は在家出家に亘るべし。

①憍慢。増上慢と同意。慢心。おごりたかぶって、仏法をあなどること。②懈怠。仏道修行をなまけること。

③計我。我見と同意。自分の勝手な考えで、仏法の教えを判断すること。④淺識。仏法の道理がわからないの

に、求めようとしないうこと。⑤著欲。欲望にとらわれて、仏法を求めないこと。⑥不解。仏法の教えをわから

うとしないこと。⑦不信。仏法を信じないこと。⑧鬺蹙。顔をしかめること。⑨疑惑。

仏法の教えを疑って、迷うこと。⑩誹謗。仏法をそしり、惡口をいうこと。⑪輕善。仏法を信じている人を輕

蔑し、馬鹿にすること。⑫憎善。仏法を信じている人を憎むこと。⑬嫉善。仏法の信者を怨嫉すること。和合

僧を破る働きをする人。⑭恨善。仏道を修行する者をうらむこと。

以上の十四のうち特に一から十までは主として信心をしていない人の誹謗であり、終わりの四つは信心している人の誹謗である。しかし、再往はこれら十四は在家・出家にわたり、どんな人も具している醜惡な生命のあらわれであり、所詮はそれら内在する惡の生命との対決が大切である。

すなわち、所詮は御本尊を信じるか信じないかによって一切が決定される。ゆえに、日蓮大聖人は次のごとく仰せである。

念仏無間地獄抄（九七ページ） 譬喩品の十四誹謗も不信を以て体と為せり。

【謗法厳戒】

謗法とは法に背くことであり、不信の者、大御本尊を信じない者である。また、大御本尊の信仰にはいつても、謗法を厳に戒めなければ成仏することはできない。かえって罰をうける結果ともなる。

顯謗法抄（四五五ページ） 謗法とは法に背くという事なり法に背くと申すは小乗は小乗経に背き大乘は大乘経に背く法に背かばあに謗法とならざらん謗法とならば・なんぞ苦果をまねかざらん……不信とは謗法の者なり……謗法とは只由なく仏法を謗ずるを謗法というか。

阿仏房尼御前御返事（一三〇八ページ） 少しも謗法不信のところが候はば無間大城疑いなるべし。

曾谷殿御返事（一〇五六ページ） 何に法華経を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し。

これらの御文のように、御本尊を疑うことが最も重大な謗法となる。絶対に疑うことなく唯一無二の御本尊を信じ奉ることが、成仏への大直道である。そのためには、また他人の謗法を責め、折伏することが肝要である。

曾谷殿御返事（一〇五六頁） 涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し駈遣し擧処せずんば當に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し擧処せんは是れ我が弟子真の聲聞なり」云云……法華經の敵を見ながら置いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と俱に地獄に墮ちん」云云、謗法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべしはかなし・はかなし。

末法においては師子王のような力をもって謗法を破折すべきことは、あらゆる御書にお示しのとおりであり、たとえ自分自身は御本尊を信じていても、謗法を見て責めないならば師も檀那も共に無間地獄へ落ちるとは、最も注意すべきことである。

開目抄下（二三六頁） 涅槃經に云く乃至「慈無くして詐り親しむは是れ彼が怨なり……彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり」

【還著於本人】

還著於本人とは、法華經觀世音菩薩普門品第二十五の文であり、「還って本人に著きなん」と読む。邪宗教の祈りによって身を害せられようとした者も、正法を信ずれば少しも害をうけず、還って反対に祈った本人が大罰をまねくということである。すなわち末法の法華經の行者、大御本尊を持つ者をそしり害せんとする者は、かえって、自らの身にそれを受けることになるのである。

日蓮大聖人は、承久の乱の時に朝廷方が真言のあらゆる邪法を用いて鎌倉方を調伏祈禱きとうしたが、反対になにも祈りをかけなかった鎌倉方に、さんざんに敗れて、三上皇は島流しになり、真言の僧等は切られたことを、還著於本人の見本として御書に引かれている。

種種御振舞御書（九二一頁） 弘法大師の邪義・慈覚大師・智証大師の僻見ひやくけんをまことと思ひて叡山・東寺・園城寺の人人の鎌倉をあだみ給いしかば還著於本人とて其の失還とがつて公家はまけ給いぬ、武家は其の事知らずして調伏も行はざれば勝かちぬ。

兵衛志殿御書（一〇九五頁） 人王八十二三四隱岐おきの法皇・阿波の院・佐渡の院・当今・已上四人・座主慈円僧正・御室・三井等の四十余人の高僧等をもて平の將軍義時を調伏し給う程に又還著於本人とて上の四王島に放たれ給いき。

それに日蓮大聖人は、真言の邪法をもつて蒙古調伏等を行なえば、かえつて日本の国が滅びると仰せられて、邪宗真言宗を徹底的に破折されている。日蓮大聖人を害せんとした東条景信や、平左衛門尉等が、あるいは落馬し、あるいは謀叛むはんの罪によつて斬殺ざんさつされた等は、還著於本人である。また四条金吾殿を主君に讒言ざんげんして失脚しつきゃくさせようとした邪宗を信ずる同僚たちが、後にかえつて追放ついほうされ、四条金吾殿は三倍の加増をたまわった等は、還著於本人というべきである。

下山御消息（三六三頁） 而るを今大蒙古国を調伏する公家武家の日記を見るに或は五大尊或は七仏薬師或は仏眼或は金輪等云云、此れ等の小法は大災を消すべしや還著於本人と成りて国忽たちまちちに亡びなんとす。ゆえに日蓮大聖人の大仏法を奉ずるわれらは、人からいかに怨嫉され、そしられようと、諸天の加護をえ

て、なんの害もなく、かえって怨嫉し、そしつた本人が大害をうけるわけである。

【病氣の原因】 びようき げんいん

自分自身が病氣になり、あるいは家族や肉親が病氣になって悩んでいる者が実に多い。これらの病氣のなかでは医者や薬で比較的かんたんに治るものもあるが、医者や薬では絶対に治らない病氣がある。仏教においては、そのような病氣の原因をどう説き、またどうしたら治ると教えているか。御書には次のように仰せられている。

太田入道殿御返事（一〇〇九） 又云く「病の起る因縁を明すに六有り、一には四大順ならざる故に病む・二には飲食節ならざる故に病む・三には坐禅調わざる故に病む・四には鬼使りを得る・五には魔の所為・六には業の起るが故に病む」云云、大涅槃經に云く「世に三人の其の病治し難き有り一には大乘を謗ず・二には五逆罪・三には一闍提是くの如き三病は・世の中の極重なり」云云。

治病大小権実違目（九九五） 夫れ人に二の病あり一には身の病・所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一・已上四百四病なり、此の病は設い仏に有らざれども・之を治す所謂治水・流水・耆婆・扁鵲等が方薬・此れを治するにゆいて愈えずという事なし、二には心の病・所謂三毒乃至八万四千の病なり、此の病は二天・三仙・六師等も治し難し何に況や神農・黄帝等の方薬及ぶべしや、又心の病・重重に浅深・勝劣分れたり。

中務左衛門尉殿御返事（一一七八頁） 夫れ人に二病あり、一には身の病……二には心の病（前引と同文の

ゆえ略す）。

以上のように太田入道殿御返事には止観の文を引き、六つの原因をあげて特に業や鬼魔の所為によつて起こる病は、仏法によらなければ治すことができないことを示されている。次の治病抄の文は、身の病と心の病とに立て分け、身の病は医者で治るが、心の病は仏法によらなければならなし、心の病に、また重々の浅深を立てて、六道凡夫の病は小乗教でよい。小乗の病は大乗教で治す、権大乘の病は実大乘の法華經をもつて治す、法華經の流布すべき時代に権大乘を流布し、その謗法によつて起こる病は、権大乘をもつて治そうとして、効力がないのみか、かえつてその勢いを増す。法華經にまた二經あり、迹門と本門であつて末法には法華經の本門が流布すべきであり、それ以外の經教はすべて謗法となり、かえつて病を増長するばかりである、とご教示になっている。

ゆえに、日蓮大聖人が、ご病氣の時に御みずから四条金吾殿の良薬を服せられたように、医者や薬で治る病氣は、それでよろしい。しかし医者や薬で治らぬ業病や心の病は、正法誹謗の罪で病になったのであるから、あくまでも正法を信ずる以外には治らない。たとえ、治つたようにみえても、他の業病に冒されるのである。その原理は法華經に次の如く説かれている。

法華經普賢菩薩勸発品第二十八 是の經典を受持せん者を見て、其の過惡を出さん。若しは実にもあれ、若しは不実にもあれ、此の人は現世に白癩の病を得ん。若し之を輕笑すること有ん者は、当に世世に、牙齒疎欠、醜唇平鼻、手脚縲戾し、眼目角疎に、身体臭穢にして、惡瘡膿血、水腹短氣、諸の惡重病あるべし。

法華經譬喻品第三 若し医道を修め、方に順じて病を治せば、更に他の疾を増し、或は復死を致さん、若し自ら病有らば人の救療すること無く、設い良薬を服すとも而も復増劇せん。

【変毒為薬】

御本尊の偉大な功德により毒を変じて薬となす、すなわち苦悩の多いわれわれの生活にあつて、信仰していれば、その苦しみにより、いよいよ信心を深め、かえつて大利益を得る。すなわち、小罰を変じて大利益とするのである。

太田入道殿御返事（一〇〇九頁） 竜樹菩薩の大論に云く「……譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」云云、天台此の論を承けて云く「譬えば良医の能く毒を変じて薬と為すが如く乃至今經の得記は即ち是れ毒を変じて薬と為すなり」云云。

始聞仏乘義（九八四頁） 竜樹菩薩・妙法の妙の一字を釈して譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し等云云、毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三道なり薬とは何物ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ三道を変じて三徳と為すのみ。

治部房御返事（一四二六頁） 例せば父母を殺す人は何なる大善根をなせども天・是を受け給う事なし、又法華經のかたきとなる人をば父母なれども殺しぬれば大罪還つて大善根となり候。

治部房御返事にお示しの原理は、価値観から拝すれば当然のこととして日常生活に行なわれている道理であ

る。すなわち小善が中善に背くときは中惡となり、中善でも大善に背けば大惡となる。

【転重輕受】

御本尊の功德力により重罪を転じて輕く受け、現世に謗法の罪をことごとく消滅して即身成仏する、これを転重輕受という。

佐渡御書（九五九頁） 般泥洹經に云く「善男子過去に無量の諸罪・種種の惡業を作らんに是の諸の罪報・或

は輕易せられ……及び余の種種の人間の苦報現世に輕く受くるは斯れ護法の功德力に由る故なり」等云云。

右の經文は般泥洹經の文であるが、原理は一つである。すなわち、われわれは過去世に無量の謗法の罪を重ねてきたから現世に苦悩の報を受けている。しこうして御本尊を受持し信心折伏に励むならば、護法の功德力により現世に輕くその罪を受ける。

しかし将来長い長い期間にわたって消滅すべき罪報が現世に成仏するため一時に競い起こるから、ともすると疑いを生じやすい。このときが肝心である。自分では大難に驚くことがあっても、実は、自身の過去世の罪を輕く消していることを常に忘れてはならない。

転重輕受法門（一〇〇〇頁） 涅槃經に転重輕受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして未來に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦みぱつときへて死に候へば人天・三乘・一乘の益をうる事の候。

【五十展転】

法華經隨喜功德品第十八に五十展轉の功德について説かれている。すなわち仏の滅後に法華經を聞いて隨喜して人に伝え、伝え聞いた人が隨喜してさらに他の人に伝え、このようにして五十番目に伝え聞いた人は、聞いた話も隨喜の心も、そうとう薄くなっているが、それでも絶大な功德があるというのである。いわんや、最初に聞法して隨喜した人の大功徳は、測り知れないものがあるわけである。

法華經隨喜功德品第十八 阿逸多、如來の滅後に、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び余の智者、若しは長、若しは幼、是の經を聞いて、隨喜し已って、法會より出でて余處に至らん。若しは僧坊に在り、若しは空閑の地、若しは城邑、巷陌、聚落、田里にして、其の所聞の如く、父母、宗親、善友、知識の爲に、力に隨つて演説せん。是の諸人等、聞き已って隨喜して、復行いて轉教せん。余の人聞き已って、亦隨喜して轉教せん。是の如く展轉して、第五十に至らん。阿逸多、其の第五十の善男子、善女人の隨喜の功德を、我今之を説かん。汝當に善く聽くべし……我今分明に汝に語る。是の人、一切の樂具を以つて、四百萬億阿僧祇の世界の、六趣の衆生に施し、又、阿羅漢果を得せしめん。所得の功德は、是の第五十の人の法華經の一偈を聞いて、隨喜せん功德には如かじ。百分、千分、百千萬億分に於て、其の一にも及ばじ。乃至算數譬喩も知ること能わざる所なり。阿逸多、是の如く第五十の人の展轉して、法華經を聞いて隨喜せん功德、尚無量無邊阿僧祇なり。何に況や、最初會中に於いて、聞いて隨喜せん者をや。其の福復勝れたること、無量

無辺阿僧祇にして、比ぶること得べからず。

すなわち第五十人目の、ただ随喜し、ただ自行のみの功德は、四百萬億阿僧祇の世界の六趣四生は一切衆生に八十年の間、一切の樂具を布施し、法を説いて一時に阿羅漢果等の四果を得させる大功德よりも、百倍、千倍、百千萬倍もすぐれているのである。

いわんや、最初に直接に正法を聞いて随喜した人の功德は無量である。いわんや、末法の御本仏日蓮大聖人の大仏法にあつて随喜し、仏勅のまゝに折伏を行ずる者の功德は絶大である。日蓮大聖人は、末法に出現する弟子の位を、次のように仰せである。

四信五品抄（三四二頁） 問う汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華經と称する其の位如何、答う此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず將た又真言等の諸宗の元祖・畏・嚴・恩・藏・宣・摩・導等に勝出すること百千萬億倍なり、請う國中の諸人我が末弟等を輕ずる事勿れ進んで過去を尋ねれば八十萬億劫に供養せし大菩薩なり豈熙連一恒の者に非ずや退いて未來を論ずれば八十年の布施に超過して五十の功德を備う可し天子の襁褓に纏れ大竜の始めて生ずるが如し蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ。

【福ふく】

【運うん】

正法を信ずることによって獲得する、幸福な良き運命、宿命を福運という。反対に邪法を信ずれば不幸な運

命、惡運、不運となるのである。

福運を積んでいくならば、人生、生活は、すべて幸福な境涯に変わっていく。しかして、福運が尽きたときは、どんな方法、手段をもってしても、やることなすことが、すべて逆目さかめに出て不幸な生活になっていく。俗に運の良し悪しあを気にする人があるが、真実の意義は、ここにあるのである。

立正安国論（一九六） 仁王經に云く「我今五眼あきらかをもって明に三世を見るに一切の国王は皆過去の世に五百の仏に侍つかえるに由よって帝王主と為ることを得たり、是ここを為もって一切の聖人羅漢らんかん而も為に彼の国土こくどの中ちゅうに來生らいじやうして大利益を作なさん、若し王の福尽きん時は一切の聖人皆為に捨て去らん、若し一切の聖人去らん時は七難必ず起らん」

末法今時において、福運を積むのは、ただ三大秘法の大御本尊を信じて折伏を行ずる以外にはない。いかなる惡運、不運に嘆なげく人といえども、一たび正法を信ずれば變毒へんどく為藥やく、転重てんじゆう輕きやう受じゆの大功德によって、大福運を身につけることができるのである。現在、恵まれた生活いとなを営いんでいる人は、一応は過去に積んだ福運によるといえるが、今世において正法を信じなければ、必ずいつかは福運が尽きるときがくるのである。いわんや、正法に反対して誹謗ひぼうする人においてをやである。

【顯益けんやく・冥益みやうやく】

仏法で現証を第一とすべきことは、現証論の項で述べたが、この現証に二つある。目に見えて生活や自身の

うえにはつきり現われる功德の現証を顕益といい、そのときは目には見えないようではあるが、五年十年とたつうちに言葉では説明できないほどの大利益をうける——それを冥益という。

この二つのうち、末法は冥益が表であり真の大利益は冥益である。たとえば、俗に「桃栗三年、柿八年」といわれるように、樹木でさえ種をまいてから成長し大木になるまでに、それぞれある期間が必要であり、一日一日の成長は目に見えない。しかし三十年、五十年とたてば、堂々とそびえる大木になるのである。人間革命の功德も、三大秘法の御本尊を信じて仏種を植えてから、一日一日の成長は目を感じなくとも、一年、三年、七年と水の流れるように信心していけば、すばらしい人間革命の大樹に育ち無量の功德の花を咲かせ、福運の果実が実ることになる。ゆえに御書にいわく、

教行証御書（一二七七頁） 正像に益を得し人人は顕益なるべし在世結縁の熟せる故に、今末法には初めて下種す冥益なるべし。

時代の混乱と民衆の苦悩に乗じて邪宗・邪教が流行し、奇怪な通力を本として世間をたぶらかし、一時的な顕益を求めて邪教を信じた人は、ますます不幸のどん底に落ちていく。これを戒められて御書にいわく、
報恩抄（三一九頁） 古の人人も不可思議の徳ありしかども仏法の邪正は其にはよらず……伝教大師の三日が内に甘露の雨をふらしておはせしも其をもって仏意に叶うとは・をほせられず。

題目弥陀名号勝劣事（一一四頁） 先ず通力ある者を信ぜば外道天魔を信ずべきか。

星名五郎太郎殿御返事（一二〇九頁） 今此の善導・法然等は種種の威を現じて愚癡の道俗をたぶらかし如来の正法を滅す、就中彼の真言等の流れ偏に現在を以て旨とす、所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り莊

園の望をいのる、是くの如き少分のしるしを以て奇特とす。

唱法華題目抄（一六六） 実經に入らざらん者は或は魔にたばらかされて通を現ずるか、但し法門をもて邪正をただすべし利根と通力とにはよるべからず。

以上のように魔の通力を打破された日蓮大聖人は、最高無上の幸福たる成仏を唯一の念願とされ、われわれ末弟に垂範すいはんされたのであり、これこそ真実最高の大冥益である。

四条金吾殿御返事（一一六九） 日蓮は少わかより今生のいのりなし只仏にならんとをもふ計りなり。

しかし、末法の信心に顕益がないわけではない。顕益は次のような条件の時に必ずうけられる。すなわち、第一に、初信の功德。これは仏道修行を積まなくとも、入信して御本尊を奉持ほうじしただけで、あるいは入信を決意しただけで、御本尊にこのような功德があるという証拠として、功德がうけられるのである。

第二に、その問題が解決しなかったら、生命にもおよぶような苦難をうけなければならぬというようなきに、御本尊を心から信じて祈れば願いは必ずかなう。

第三に、邪宗・邪義を破折し、正法と邪法との勝負になったときに、嚴然げんぜんと道理のうえにおいても、現証のうえにおいても、正法が必ず勝つことが証明される。

また冥益のうえに顕益があるのである。

【不自惜身命】

ふじしやくしんみょう

日蓮大聖人の御書に、また法華經等に、仏道修行には必ず大小の難があるが、身命を惜おしまないほどの強い

信心で乗り越えることによって、絶対的幸福を得られることが説かれている。

また信心において、大御本尊を渴仰しお慕いすること、身命を惜しまないほどの信心であるべきことを説か
れている。

法華經如来寿量品第十六 一心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまず。

法華經勸持品第十三 是の經を説かんが為の故に、此の諸の難事を忍ばん、我れ身命を愛せず、但無上道
を惜しむ。

聖愚問答抄(四九六頁) 汝実に後世を恐れば身を輕しめ法を重んぜよ是を以て章安大師云く「寧ろ身命を
喪ふとも教を匿さざれとは身は輕く法は重し身を死して法を弘めよ」と、この文の意は身命をば・ほろぼす
とも正法をかくさざれ、其の故は身はかるく法はおもし身をばころすとも法をば弘めよとなり。

このように、仏法のためには身命を惜しまないということは、最高の信心の姿である。ゆえに身命を惜しま
ない強盛な信心があれば、他のどんなことでもでき得るわけである。

七百年昔には熱原三烈士等の死身弘法の信心の鑑があつた。また最近では牧口初代会長、戸田前会長のお姿
は、不自惜身命の信心の姿であつた。

撰時抄(二九一頁) 法華經の八の卷に云く「若し後の世に於て是の經典を受持し誦誦せん者は乃至諸願虚し
からず、亦現世に於て其の福報を得ん」又云く「若し之を供養し讚歎すること有らん者は当に今世に於て現
の果報を得べし」等云云、此の二つの文の中に亦於現世・得其福報の八字・当於今世・得現果報の八字・已
上十六字の文むなしくして日蓮今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言に同じく多宝の証明は俱伽利が

妄語に異ならじ、謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮つべからず、三世の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子等心みに法華經のごとく身命もおしまず修行して此の度仏法を心みよ、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。佐渡御書（九五七頁） 強敵を伏して始て力士をしる、悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し、これおごれるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべしおごれる者は必ず強敵に値ておそるる心出来するなり。

しかして、不惜身命に、事と理とがあることを御義口伝に説かれている。

御義口伝上（七四七頁） 第二不惜身命の事。御義口伝に云く身とは色法・命とは心法なり事理の不惜身命之れ有り、法華の行者田畠等を奪わるは理の不惜身命なり命根を断たるを事の不惜身命と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は事理共に値うなり。

すなわち全力をあげて広宣流布・民衆救済を目指し、学会活動に励むことは、事理共に不自惜身命の信心である。

日興遺誡置文（一六一八頁） 未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事。

義浄房御書（八九二頁） 寿量品の自我偈に云く「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」云云、日蓮が己心の仏界を此の文に依つて顯はすなり、其の故は寿量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事・此の經文なり秘す可し秘す可し……日蓮云く一とは妙なり心とは法なり欲とは蓮なり見とは華なり仏とは経なり、此の五字を弘通せんには不自惜身命是なり、一心に仏を見る心を一にして仏を見る一心を見れば仏なり、無作の三身の仏果を成就せん事は恐くは天台伝教にも越え竜樹・迦葉にも勝れたり。

【有徳王と覚徳比丘】

立正安国論（二八頁） 涅槃經に云く乃至又云く「善男子・過去の世に此の拘尸那城に於て仏の世に出でたまうこと有りき歡喜増益如来と号したてまつる、仏涅槃の後正法世に住すること無量億歳なり余の四十年仏法の末、爾の時に一の持戒の比丘有り名を覚徳と曰う、爾の時に多く破戒の比丘有り是の説を作すを聞きて皆惡心を生じ刀杖を執持し是の法師を逼む、是の時の国王名けて有徳と曰う是の事を聞き已て護法の為の故に即便ち説法者の所に往至して是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に戰鬪す、爾の時に説法者厄害を免ることを得たり王・爾の時に於て身に刀劍鉾槊の瘡を被り体に完き処は芥子の如き許りも無し、爾の時に覚徳尋いで王を讃めて言く、善きかな善きかな王今眞に是れ正法を護る者なり当來の世に此の身当に無量の法器と爲るべし、王是の時に於て法を聞くことを得已て心大に歡喜し尋いで即ち命終して阿閼仏の国に生ず而も彼の仏の爲に第一の弟子と作る、其の王の將・人民・眷属・戰鬪有りし者・歡喜有りし者・一切菩提の心を退せず命終して悉く阿閼仏の国に生ず、覚徳比丘却て後壽終つて亦阿閼仏の国に往生することを得て彼の仏の爲に聲聞衆中の第二の弟子と作る、若し正法尽きんと欲すること有らん時当に是くの如く受持し擁護すべし、迦葉・爾の時の王とは即ち我が身是なり、説法の比丘は迦葉仏是なり。迦葉正法を護る者は是くの如き等の無量の果報を得ん」

以上、經文に明らかなように有徳王は破戒の惡僧と戰つて覚徳比丘を助けた。王はこのとき全身に傷を受

け、命が終わったが、王はこの護法の功德で阿閼仏の国に生まれてその仏の第一の弟子となり、覺徳比丘は第二の弟子となった。さらにその王とはいまの釈迦仏であるという。これを現在にあてはめれば、有徳王の戦いとは創価学会の折伏であり、覺徳比丘は総本山大石寺である。

そして広宣流布はこの有徳王・創価学会により成就じょうじゆできるのである。

三大秘法さんだいひぽう稟承事りんじやうじ（一〇二二頁） 戒壇とは王法仏法に冥みやうじ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覺徳比丘の其の乃往むかしを末法濁惡の未来に移さん時勅宣並ちやくせんに御教書みきやうしよを申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か。

【異い体たい同どう心しん】

異体同心の心は觀心の心であり、信心の心である。体は異からなっても信心が同じであり、觀心が同じであることを意味するのである。

このように信心が同じであるがゆえに、互いにそねむことなく、憎むことなく、團結して御本尊に仕えたてまつる、この精神を和合わがう僧そうの精神という。

異体同心ということ、あやまって、同じ宗門であるから二人の体が同じであり、仲良くしなければならぬなどというのは、まったく浅薄せんぱくな觀察である。また、いたずらに世法のことについて「異体同心であるから金をかせ」とか「商売の手伝いをせよ」などというのは、あやまった精神である。異体同心とは、互いの信心

を励ます言葉として用いるべきである。

また御書には、異体同心にして南無妙法蓮華經と唱えるのが信心であり、広宣流布の大願もかなうのであると仰せである。

創価学会は異体同心なればこそ、広宣流布の大願を成し遂げることができるのである。

生死一大事血脈抄(一三三七頁) 総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か、剩え日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し。

異体同心事(一四六三頁) はわき房さど房等の事あつわらの者どもの御心ざし異体同心なれば万事を成し同

体異心なれば諸事叶う事なしと申す事は外典三千余卷に定りて候、殷の紂王は七十万騎なれども同体異心

なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なればかちぬ、一人の心なれども二つの心あれ

ば其の心たがいて成ずる事なし、百人・千人なれども一つ心なれば必ず事を成ず、日本国の人人は多人なれ

ども体同異心なれば諸事成ぜん事かたし、日蓮が一類は異体同心なれば人人すくなく候へども大事を成じ

て・一定法華經ひろまりなんと覺へ候、悪は多けれども一善にかつ事なし、譬へば多くの火あつまれども一

水にはきゑぬ、此の一門も又かくのごとし。

諸法実相抄(一三六〇頁) いかにも今度・信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし、日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。

【如説修行によ せつ しゆ ぎよう】

仏の教説のとおりに修行すること、如説修行によつてのみ、眞の成仏をはかれるのである。如説修行抄には、末法における如説修行の姿を、詳しく教示されている。いま、われわれにとっては、末法の御本仏日蓮大聖人の仰せどおり、三大秘法の大御本尊を信じて折伏を行ずる以外に如説修行はない。

如説修行抄（五〇二頁） 問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや、答えて云く……此等の約をきての明鏡を本として一分もたがえず唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり。

如説修行抄（五〇三頁） 凡仏法を修行せん者はしやうしやく摂折二門を知る可きなり一切の経論此の二を出でざるなり……末法の始めの五百年には純円・一実の法華經のみ広宣流布の時なり……末法・今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へしぞ、誰人にも坐せ諸經は無得道・墮地獄の根源・法華經独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し。

末法における如説修行の者とは、日蓮大聖人の弟子だんな檀那であり、現在は日蓮正宗創価学会員以外にはないことを知るべきである。また如説修行する者は必ず三類の強敵ごうてきがあるのである。三類の強敵を一身に受けられた日蓮大聖人こそ、如説修行の法華經の行者であり、御本仏なることが明らかにわかるのである。

しかして、現在においては、創価学会こそ、この原理にかなう如説修行のものといえるのである。

如説修行抄(五〇四頁) 如説修行の法華經の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ、されば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子檀那等是なり。

日寛上人の如説修行抄筆記には、詳しく解釈が述べられているが、その一部をとつて述べてみよう。

如説修行は内外ないげ大小に通じ、人法相對に約し、師弟相對に約し、自行化他に約せるが、如説修行抄の意は、大小・本迹・觀心のなかには、本門觀心の如説修行である。また末法今時の如説修行の師弟、人法である。さらに身口意しんぐいの三業さんごうで折伏を行ずる人こそ、眞の如説修行の人である。(富要四卷四〇七頁以下参照)

【自行化他じぎょうけた】

自行化他には、修行に約する場合と、法体に約する場合の二つがある。

まず修行に約する場合についていえば、自行とは自分が行法の利益をうけるための修行をいう。すなわち末法今時においては、朝晩の勤行、唱題などが、この自行にあたる。また化他とは他人に仏法の利益をうけさせるための化導をいい、末法今時においては折伏行や信心指導などが、この化他にあたる。

しかして、南無妙法蓮華經の題目についていうならば、正法・像法時代の題目は、天台大師や伝教大師が、ただ自行のために南無妙法蓮華經という理行の題目を唱えた。しかるに末法においては、御本仏日蓮大聖人が自行化他のために、事行の題目を唱えられ、われわれもまた同じく自行化他の題目を唱えているのである。

三大秘法稟承事（一〇二二頁） 題目とは二の意有り所謂正像と末法となり、正法には天親菩薩・竜樹菩薩・題目を唱えさせ給いしかども自行ばかりにしてさて止め、像法に南岳天台等亦南無妙法蓮華經と唱え給いて自行の爲にして広く他の爲に説かず是れ理行の題目なり、末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり名体宗用教の五重玄の五字なり。

次に自行化他を法体に約す場合がある。自行とは、究竟眞実の随自意の妙法である。化他とは九界の衆生を導くために方便をおびている随他意の教えである。釈迦仏法においては、自行の法とは法華經であり、化他の法とは爾前の諸經である。また日蓮大聖人の仏法においては、本地自行の法とは、三大秘法の文底下種仏法であり、垂迹化他の法とは五時八教の釈迦仏法である。

三世諸仏總勘文教相廃立（五五八頁） 夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切經とは言ひ、此れを分ちて二と爲す・一には化他・二には自行なり、一には化他の經とは法華經より前の四十二年の間説き給える諸の經教なり此れをば權教と云い亦は方便と名く……二に自行の法とは是れ法華經八箇年の説なり。

【聞法下種と発心下種】

発心下種とは、折伏をして、相手が本尊を受持したことである。聞法下種とは、折伏をしたが、いまだ大御本尊を受持しないことをいう。しかし、発心下種も聞法下種も、共に末法の折伏行であり、そのうける功

徳は同じである。

聞法下種においては、そのときは御本尊を受持できなくても、その人の心田に仏種を植えたのであるから、仏法上、必ず、その人は、いつかは信心をすることに決定されているのである。

観心本尊抄文段（富要四卷二八〇頁） 在世の下種とは唯^{ただ}是れ発心下種にして、是れ聞法下種に非^{あらざ}るなり、^{まさ}当に知るべし、下種に即ち二義有りい^まゆる聞法と発心となり、妙楽云く聞法を種と為^なし発心を芽と為すとは是れなり、此に三重の秘伝有り、又各通局有るなり、謂^いく一には権実相對、証真玄の私記第一に云く、最初聞法は必ず是れ円教若し発心を論ぜば大小定まらず等云云、文の意は最初の聞法下種は必ず是れ法華の円教なり云云、妙楽云く、余経を以て種と為さずとは是れなり、即ち是れ今家所立の第一の教相なり、二には本迹相對、謂く最初聞法必ず是れ本門なり、若し発心を論ぜば、権迹不定なり云云、即ち是れ今家所立の第二の教相なり、三には種脱相對、謂く最初聞法必ず是れ文底、若し発心を論ぜば迹本不定なり、即ち是れ今家所立の第三の教相なり、問う最初聞法必ず是れ文底の証文如何、答う宗祖の云く、一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底に秘し沈め給へり、一念三千の仏種に非ざれば有名無実なり、三世十方の諸仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり、あるいは、一乗を演説すれども妙法蓮華經の五字を以て下種と為すべき由来を知らざるか等云云。

かくのごとく文底下種の仏法からみれば、久遠元初^{くおんがんにじよ}において、すべて南無妙法蓮華經の五字七字によって聞法下種をうけているのである。

末法今世に折伏をうけて信心する者は、久遠元初の聞法下種を忘れていない人であり、これすなわち発心下

種となるのである。折伏をうけても、信心できない者は、久遠元初の聞法下種を忘れている人であり、再び聞法下種をうけるわけである。

【以信代慧】

法華經方便品第二で諸法実相、一念三千の説法を聞き、舍利弗はまず開悟した。智慧第一といわれた舍利弗も、仏説を信じてこそ初めて悟ることができたのであり、自分の智慧ではいくら精進し修行に励んでも、ついに悟ることはできなかった。このことを譬喩品第三には次のようにいっている。

「汝舍利弗なんじすら尚此なおの經に於いては信を以て入ることを得たり……己が智分おのちぶんに非ず」

舍利弗尊者すら、なおこのとおりであり、まして末法のわれわれ衆生が自分の智慧をもって悟りうるわけがない。ゆえに日蓮大聖人は「信を以て慧に代う」と次のように仰せられ、まったく智慧のない迷いの凡夫であっても、信心一途で即身成仏するむねをお示しになっている。

四信五品抄(三三九頁) 慧又堪たえざれば信を以て慧に代え・信の一字を詮と為す、不信は一闡提謗法の因・信は慧の因・名字即みょうじそくの位なり。

法蓮抄(一〇四五頁) 信なくして此の經を行ぜんは手なくして宝山に入り足なくして千里の道を企くわだつるが如し。

当体義抄(五一八頁) 日蓮が一門は正直に權教の邪法・邪師の邪義を捨てて正直に正法・正師の正義を信ず

る故に当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顯す事は本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱うるが故なり。

本因妙抄（八七二頁） 信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華經と唱え奉れば凡身即仏身なり。

【随方毘尼】

随方とは、その地方の風俗習慣に随うということである。毘尼とは戒と釈す。すなわち大綱、精神において仏教に違わない限り、その形式などは、その国情または地方のしきたりに随ってもよいという意である。

月水御書（一二〇二頁） 委細に經論を勘へ見るに仏法の中に随方毘尼と申す戒の法門は是に当れり、此の戒の心はいたう事かけざる事をば少少仏教にたがふとも其の国の風俗に違うべからざるよし仏一つの戒を説き給へり。

【善知識・悪知識】

自分の周囲の人々のなかには善知識と悪知識がある。人を仏道修行に導き、仏道を成じさせる者を善知識といい、正法の信仰を妨げ悪道に落とす者を悪知識という。善知識にあえば善根を積んで幸福になり、成仏することが出来る。悪知識にあえば幸福を取りにがし、不幸に陥り地獄に落ちる。

開目抄上(二〇八頁) 善知識と申すは一向・師にもあらず一向・弟子にもあらずある事なり。

三三藏祈雨事(一四六八頁) されば仏になるみちは善知識にすぎず、わが智慧なにかせん、ただあつきつめ^{温寒}たきばかりの智慧だにも候ならば善知識たいせ^{大切}なり。

開目抄下(二三二頁) 久遠大通^{くおんだいづう}の者の三五の塵をふる悪知識に値うゆへなり。

すなわち、われわれ末法の衆生にとって第一の善知識は、御本仏日蓮大聖人の仏法を、共に信仰し、共に折伏に励む者である。

開目抄に仰せられる悪知識とは三千塵点劫^{しんてんじょう}、あるいは五百塵点劫の昔に法華經を聴聞^{ちやうもん}したが、権大乘や小乗を説く悪知識にあつて退転し、成仏することができなかったことを仰せられているのである。

次にまた日蓮大聖人は、正法修行者に迫害を加える者を善知識なりと仰せられている。迫害する者は悪知識であるが、そのような悪人があるために正法修行者は、無量の迫害を受けることによって、過去世の謗法^{ぼうぼう}の罪障を消滅し、この世で仏道を成ずることができるとの仰せである。

種種御振舞御書(九一七頁) 釈迦如来の御ためには提婆達多^{だいばだつた}こそ第一の善知識^{ぜんちしき}なれ、今の世間を見るに人をよく^成なすものはかたうどよりも強敵が人をば・よくなしけるなり……日蓮が仏にならん第一のかたうどは景^{かげ}信^{のぶ}・法師には良觀^{りやうかん}・道隆^{どうりゅう}・道阿弥陀仏と平左衛門尉^{へいさえもんゐのじよう}・守殿^{こうどの}ましまさずんば争^{いかに}か法華經の行者とはなるべきと悦ぶ。

すなわち世間の例をみても、強敵を倒さんがために、自らの実力を養い、敵国の侵略^{しんりやく}をうけて国内が一致団結して強力となる。それと同じように、日蓮大聖人を迫害した地頭や邪宗の僧侶^{そうりよ}や鎌倉幕府は善知識であると

仰せられているのである。われわれも迫害されてこそ、初めて正法の信者であり、現世に成仏がかなうと知るべきである。

【世法と仏法】

世法と仏法とは一体である。

ゆえに「開目抄」には世法を深く知れば仏法であるとし、「観心本尊抄」には御本尊を信ずる者は世法をうると明かし、また「諸経と法華経と難易の事」には、仏法は体のごとき世法は影のごとき関係にあるから、生活に罰が続出することは、すなわち自分の信心に狂いがあることを明かし、また「檀越某御返事」にはみやつかへ（仕官）を法華経とおぼしめして励みなさいと仰せられている。

開目抄上（一八七ページ）天台云く「金光明経に云く一切世間所有の善論皆此の経に因る、若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」等云云。

観心本尊抄（二五四ページ）天晴れぬれば地明かなり法華を識る者は世法を得可きか。

諸経と法華経と難易の事（九九二ページ）仏法やうやく顛倒しければ世間も又濁乱せり、仏法は体のごとし世間はかげのごとし体曲れば影ななめなり。

檀越某御返事（一二九五ページ）御みやつかいを法華経とをぼしめせ、「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」とは此れなり。

【勇猛精進】 ゆうみょうしやうじん

法華經方便品第二 尽くして諸仏の無量の道法を行じ、勇猛精進ゆうみょうしやうじんして、名称普く聞こえたまえり。みやうしやうあまね

勇猛精進とは、勇ましく元氣に仏道修行を励んでいくことであるが、文上の釈迦仏法では歴劫修行りやくきやうといって、長くいろいろの修行を積んで初めて成仏できる。しかし、日蓮大聖人の文底下種仏法では、ただ、たゆま

ず御本尊に題目を唱え折伏に励むことに尽きるのである。日寛上人の依義判文抄えぎはんもんには、法華經宝塔品の文を引いて、勇猛精進をもつて題目となすゆえんが、詳しく説かれてゐる。いま、その一部を述べてみよう。

宝塔品第十一 此の經は持ち難しがた若し暫くも持つ者は我即ち歎喜たんきす諸仏も亦然またしかなり、是の如きの人は諸仏の歎る所ほむところ是れ則ち勇猛すなわなり是れ則ち精進なり。

この文において「是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり」の文は、能持即題目なるを明かしている。勇猛精進をもつて題目となすとはいかなるわけか。

本門の題目には信心・唱題の二意を具している。勇猛精進は信心・唱題のゆえに本門の題目となすのである。勇猛とは信心である。釈にいわく「敢いさんで為すを勇と言ひ智を竭つくすを猛と言う」すなわち勇敢にして信力を励み竭つくすのを勇猛と名づけるのである。精進とは唱題の行である。釈にいわく「無雜むざの故に精・無間むげんの故に進」と。法華文句記にいわく「勇猛精進とは二意有り一には期心在る有り二には身心俱に勤む」と。期心有在は御本尊を信ずるときをいうから信心であり、身心俱に勤むというのは唱題である。

【諸天しよてんの加護かご】

法華經には諸天善神が必ず法華經の行者を守護すると説かれている。

安樂行品 諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護す。

安樂行品 天の諸もろもろの童子以って給使きゆうじを為さん、刀杖とうじやうも加えず、毒も害すること能わじ。

そのほか総付属の段においては諸天が法華經の付属を受け、また陀羅尼品には鬼子母神・十羅刹女その他諸天善神が法華經の行者を守護すると誓ちかっている。

ゆえに日蓮大聖人は諸御書に、日蓮の大難を見て諸天善神は何をしているのか、仏前の誓いを忘れたのか、急いで飛んできて日蓮の難を救い、仏前の誓いを果たせよ。もしそうしないならば、仏罰を受けて天界の位を奪われるのみか、無間地獄へ落ちなければならぬぞ、と警告けいこくされている。このように、われわれも必ず諸天の加護をうけているのである。

しかし、その半面、日蓮大聖人も、ご在世中は数々の大難をうけられた。また、われわれも常に罪障や迫害に苦しみ、熱心に折伏すればするほどこれが増してくる。ここに諸天の加護があるかないかの問題が起こる。眼前の大迫害の嵐あらしのうちにあって、なぜ諸天加護の功力が、すぐ現われないかについて、日蓮大聖人は次のように仰せられている。

富木殿御返事（九六二頁） 今に天の加護を蒙こうむらざるは一には諸天善神此の惡国を去る故か、二には善神法味ぜんじんほうみ

を味わざる故に威光勢力無きか、三には大悪鬼三類の心中に入り梵天帝釈も力及ばざるか。

以上三箇の理由のうち、第一は立正安国論等に詳しく、第二は諫曉八幡抄等に詳しく、第三は開目抄等に詳しく明かされている。

また開目抄下(二三〇頁)には現罰の有無について、次のように仰せられている。第一に、前世に法華誹謗の罪なき行者を迫害すれば、たちまち現罰をうける。第二に、次の世に無間地獄へ落つべき者は現世に、いかに法華の行者を迫害しても現罰はない。第三に、はなはだしい悪人でなければ現世に謗法してもすぐ後悔して正法に帰依することができる。第四に、諸天善神が謗法の悪国を捨て去ったがゆえに現罰がない。

その結論として、

開目抄下(二三二頁) 詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん。

との大確信に立つ時には、一切の留難も水泡となり、現身に即身成仏の金剛不壞の境地を感得するのである。

【魔の通力】

魔とは梵語であり、障礙、破壊、奪功德などと訳す。正法を持つ者の信心を妨害したり、死魔、病魔などは人命を害し、あるいは病を起こす働きをなし、天子魔は権力者や父母の姿をかりて信心を弾圧するなど、すべて仏と反対の働きをする。魔には、三魔、四魔、十魔などがあり、仏身や菩薩身や天界の姿を現じている。魔が人を不幸にしようとする、いちじるしい働きを魔の通力という。

通力とは自在じざい然ねん礙げの働きをいい、通または神力ともいう。通力には、爾に前ぜん教、法華經を修行することによつて、いろいろな種類があるが、おもな四種を示せば次のごとくである。

第一に生得通しょうとくとは、業得通ともいい、鬼畜などの生まれながらにもっている業通である。

第二に報得通とは、諸天の示す通である。

第三に修得通とは、外道や二乗等が修行して得る通で、外道は五通、二乗以上は六通を得るとされている。

六通とは、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、如意身通にょい、漏尽通ろうじんである。

第四に法華經迹門の神通妙じんずう、本門の本神通妙は、仏の通力である。如来寿量品の如来秘密神通之力じんずうしりきとは、文底下種仏法から拝すれば、御本仏の最高の通力である。これは、あらゆる人を御本尊の功德によって絶対的幸福に導くお力である。

仏と魔は同所にすむといわれるとおり、魔は仏に似た姿をもって人を不幸にする働きを示す。信心強盛に魔を魔と見破つて信心に励めば、必ず魔の通力は粉碎ふんさいされ、一段と境涯を開いていけるのである。仏の神通力と魔の通力は厳に區別していかなければならない。

最蓮房御返事(二三四〇頁) 予日本よの体を見るに第六天の魔王智者の身に入りて正師を邪師となし善師を悪師となす、經に「惡鬼入其身あつぎにゆうこしん」とは是なり、日蓮智者に非ずと雖いふとも第六天の魔王・我が身に入らんとするに兼かねての用心深ければ身によせつけず、故に天魔力及ばずして・王臣を始として良觀等の愚癡ぐちの法師原に取り付いて日蓮をあだむなり。

唱法華題目抄(一六頁) 通力をもて智者愚者をばしるべからざるか、唯仏の遺言ゆいの如く一向に權經を弘めて

実經をつゐに弘めざる人師は權經に宿習しゆくじゅうありて実經に入らざらん者は或は魔にたほらかされて通を現ずるか、但し法門をもて邪正をただすべし利根と通力とにはよるべからず。

題目弥陀名号勝劣事(一一四パー) 先ず通力つうりきある者を信ぜば外道天魔を信ずべきか或る外道は大海を吸干すいはし或る外道は恒河こうがを十二年まで耳に湛たたえたり第六天の魔王は三十二相を具足して仏身を現ず、阿難尊者あなんそんじや・猶魔なごと仏とを弁わきまへず善導・法然が通力いみじしというとも天魔外道には勝れず、其の上仏の最後の禁いさしめに通を本とすべからずと見えたり。

【供く 養よう】

供養とは、供給奉養くきゆうほうようの義である。仏や法に対して報恩のために、真心を尽くして奉ずるのを供養という。

供養の種類は古来、多く説かれている。すなわち二種供養、事理供養、三種供養、三業供養、四事供養、四種供養、五種供養、六種供養、十種供養などがあるが、いま二種供養と事理供養を取り上げてみよう。

二種供養とは、第一に財供養であり、第二に法供養である。財供養とは末法の御本仏日蓮大聖人ご在世中に佐渡や身延等において、身命の危険をおかして阿仏房や南条時光殿などが食物、衣類等を奉たてまつったのがこれにあたる。いまでは広宣流布の根本道場たる正本堂、大客殿、大講堂、奉安殿等の建設のために創価学会員が真心の醵金きょきんをした等が、この供養である。しかして、財のなかで最高の物はわが生命であるがゆえに、生命を捧たさげて供養するのが最高の供養である。

第二に法供養とは、仏の所説のごとく正法を弘め民衆救済の一助をになうのが、これである。いま末法の時になつた法供養とは、ただ折伏の二字に尽きる。すなわち心なき人々の悪口や誹謗のなかを忍辱の鎧を着て、折伏行にひたすら励んでいる創価学会員こそ、まことの法供養を行なっているといえよう。

財供養と法供養を比べてみれば、もちろん法供養の方がすぐれているのである。

阿仏房御書（一三〇四頁）抑そもそも宝塔の御供養の物・錢一貫文・白米・しなじなをくり物たしかに・うけとり候おわいたんぬ。

本尊供養御書（一五三六頁）法華經御本尊御供養の御僧膳料の米一駄・蹲いよのい鴟一駄・送り給ひ候おわい畢んぬ。

この御文はとりもなおさず財供養の文であり、類文はたくさんある。

「供養する事有らん者は福十号に過ぐ」との文は、法供養の文であり、大御本尊を賛嘆唱題し、折伏を行ずる者は、仏の十号に過ぐる大功德、大福運ありとの文証である。また「釈迦仏に財宝の限りをつくして供養するよりも末法の法華經の行者に供養する方が、その功德百千万倍す」との御文が多いが、これこそ末法の法華經の行者たる日蓮大聖人こそ御本仏であられ、釈迦しやくぶつ仏は迹しやくぶつ仏にすぎないことを表わしているものである。

次に事理の供養とは、

白米一俵御書（一五九六頁）ただし仏になり候事は凡夫は志ざしと申す文字を心得へて仏になり候なり、志ざしと申すは・なに事ぞと委細いさいにかんがへて候へば・觀心の法門なり、觀心の法門と申すは・なに事ぞとたづね候へば、ただ一つ著きて候衣を法華經にまいらせ候が・身はのかわをわぐにて候ぞ、うへたるよ世に・これは離なしては・けう今日の命をつぐべき物もなきに・ただ但ひとつ候御料これをを仏にまいらせ候が・身命を仏にまいらせ候

にて候ぞ、これは藥王のひぢを臂やき・雪山童子の身を鬼にたびて候にも・あいを劣とらぬ功德にて候へば・聖人の御ためには事供じくやう・凡夫のためには理供養くやう・止觀の第七の觀心の檀波羅ばら蜜と申す法門なり。すなわち一往は、昔の聖人たちが生命を投げ出した供養が事供養であり、凡夫の供養は理供養となるが、再往は、御本尊に対する一切の供養こそ事供養となるのである。

【臨終りんじゆうの相そう】

この世における善業・惡業の総決算が臨終であり、また来世への第一歩ともなる。ゆえに臨終の相は、最も大切であり、仏説のように色白く安らかに題目を唱えて、この世を終わるように念願すべきである。

妙法尼御前御返事(一四〇四頁) 日蓮幼少の時より仏法を学び候しが……先臨終ますの事を習うて後に他事を習うべしと思ひて……大論に云く「赤白端正せきびやくたんせいなる者は天上てんじやうを得る」云云、天台大師御臨終の記に云く色白し。千日尼御前御返事(一三二六頁) 人は臨終の時地獄に墮つる者は黒色となる上其の身重き事千引ちびきの石の如し善人は設たとひ七尺八尺の女人なれども色黒き者なれども臨終に色變じて白色となる又輕き事鷲毛がもうの如し輒やわらかなる事兜羅縣とろめんの如し。

教行証御書(一二七九頁) 一切は現証には如しかず善無畏ぜんむい・一行ぎやうが横難横死おうなんおうし・弘法・慈覺が死去の有様・実げに正法の行者是くの如くに有るべく候や……それほどに浦山敷うらやましきもなき死去にて候ぞやと・和らかに又強く両眼を細めに見・顔貌かおばえに色を調ととのへて閑しずかに言上すべし。

【女人成仏にょにんじょうぶつ】

爾前經では女人の不成仏を説き、法華經にいたって初めて女人も成仏を許され、しかも提婆品だいばでは竜女の即身成仏を現証で示されている。

女人成仏抄（四七二頁）には華嚴經の「女人は地獄の使なり……外面は菩薩に似て内心は夜叉やしやの如し」等の文を引き、また五障・三従じゆうをあげて、外典にも爾前經にも女人のきらわれていることを示されている。しかし竜女の即身成仏を現証として、法華經の功力くりきによれば、一切の女人が即身成仏すべきことをお示しになっている。

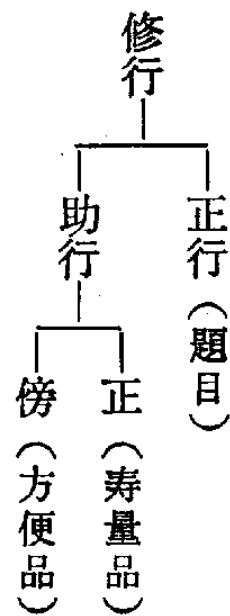
このほか法華經題目抄（九四六頁）をはじめ、数多くのお手紙にも、女人の成仏は法華にかぎることを示されている。ゆえに末法においては女性の幸福になる唯一の道は、大御本尊を絶対に信じたてまつる以外にないことは明らかである。なお女人の不幸の原因となる五障三従は次のとおりである。

五障……女人は次の五になることができない。一に梵天王・二に帝釈たいしやく・三に魔王・四に転輪聖王てんりんじやう・五に仏身。
三従……少時には父母に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う。

開目抄下（二二三頁） 竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸もろもろの小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乗經には成仏・往生をゆるすやうなれども或は改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、挙一例諸こいちれいしよと申して竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。

ほうべんほん　じゆりようほん　どくじゆ
【方便品・寿量品を讀誦する意味】

われわれの信仰する御本尊は三大秘法の大御本尊であらせられ、寿量品文底下種の御本尊である。さて、しからば、どのようにして修行するかとなれば、修行には正助があり、正行は題目を唱えること、助行には方便品、寿量品を讀誦することである。また助行においても寿量品を正とし、方便品を傍とする。あたかも正行は米飯にあたり、助行は、ミソ汁や漬け物が米飯の味を助けるのと同様である。



以上の理由を日寛上人は当流行事抄に詳しくお述べになっている。

方便品

方便品を讀誦するのは一に所破のため、二には借文のためである。

しかも所破に二意を含んでいる。すなわち、一には体外の迹門であり、これは今日始成正覚の仏の所証の法であり「在々処々に迹門を捨てよ」と仰せられた迹門である。二には体内の迹門であり、これは従本垂迹の仏の所証の法であり、讀誦の意は、まさにここにあるのである。

また借文の辺も両意を含んでいる。一には久遠本果の所証の法を顕わすのであり、通得引用多くこの意によるのである。二には遠く久遠名字の所証を顕わすのであり、讀誦の意はここにあるのである。

寿量品

寿量品を誦誦するのは一に所破のため、二には所用しよゆうのためである。すなわち、同じ寿量品の一文であつても、その顛本けんぽんには、文上顛本・文底顛本の両義があり、文上は五百塵点劫成道じんてんごう、文底は久遠元初がんによの本仏をさしている。しかしてその文上の寿量品にも、また体内たいない・体外たいげがあり、体外は文底下種御本尊の建立以前、体内は御本尊を修行するために用いる寿量品となる。しかしてただ一度寿量品を誦誦しながらも、その文上体内の辺は所破しよはとなり、文底の辺は所用しよゆうとなるのである。

なお方便品の両義は「唯仏与仏乃能究尽ゆいぶつよぶつないのうくじん」をあげて、寿量品の両義は「我実成仏已来がじつじょうぶつらい」の文をあげて説明されてゐるから、当流行事抄を詳しく拝すべきである。

月水御書（二二〇一頁） 法華経は何れの品も先に申しつる様に愚かならねども殊ことに二十八品の中に勝れて・めでたきは方便品と寿量品にて侍りはべ、余品は皆枝葉にて候なり、されば常の御所作には方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候へ。

四菩薩造立抄そりうりゆう（九八九頁） 日蓮が弟子と云つて法華経を修行せん人人は日蓮が如くにし候へ。